

## 第4章

# 明治の発展

大洲の発展に  
尽力した人や  
今も残るあの建物を  
紹介するよ。

よーし一気に  
覚えちゃうぞー。

我が国は激動の幕末を迎え、  
鎖国から開国へと大きく方向転換し、  
明治時代に入ります。

日本は、欧米諸国から法律や技術、教育、文化  
などを積極的に取り入れました。この時期、すで  
に欧米諸国はアジア各地へ進出し、貿易をしたり  
軍事力によって支配したりしていました。日本は、  
国を豊かにして強い軍隊をもつことに力を入れ、  
これらの国々に対抗しようとして、日清戦争や日  
露戦争という大きな戦争を起こすことになりました。  
このように、明治時代は日本の大転換期とな  
りました。しかし、あまりにも急速な変革だった  
ため、全国各地でたくさんさんの混乱が起きました。  
それは、大洲でも同じ状況でした。  
それでは、明治の始まりの、混乱した大洲から  
産業の発展を見ていきましょう。

# ① 大洲県大参事 山本尚徳 (1826~1871)

山本尚徳は、1870（明治3）年、それまでの藩主加藤泰秋に代わり、**大洲の政治を中心になって進める「大参事」という役職に就きました。**翌1871（明治4）年7月には廃藩置県によって大洲県が誕生し、尚徳が大洲の県政を取り仕切ることになりました。そして、文明開化の進歩的な方針を県政に採用しようとはしました。

その一つに、**養蚕の奨励**がありました。

江州（今の滋賀県）から桑の苗を取り寄せて、無償で農家に配ったり、自分から率先して養蚕を行ったりしました。また、茶の木の栽培も奨励し、京都の宇治から製茶工を雇い入れて、製茶の産業も興しました。

さらに、**英語を学ぶことを奨励するとともに、西洋医学を積極的に取り入れるなど、大洲地方の産業や文化の発展にも力を注ぎ、大きな成果をあげていました。**

しかし、尚徳が進めようとしたこれらの政治は、旧藩士全員の賛同を得るには至らず、対立も生んでしまいました。それがもとで、加藤泰秋が上京する際には、泰秋を尚徳が追い出したというわさが立ったり、種痘（ワクチンの接種）の強制的な実施で子どもたちを殺すといううわさが民衆に広がったりして、尚徳に対する不満や反感がどんどん高まっていきました。

そして、尚徳の政治に反発した手成（現大洲市手成）と戒の川（現大洲市長浜町戒川）両村の農民が、1871（明治4）年8月8日、鉄砲や竹槍などで武装して、抗議のために大洲へ向かいました。八多喜や五郎を始め、他地区の農民も同調し、農民の大集団が若宮河原に集まりました。

河原に集まった農民たちは、堤防の御用敷を切り払い、たくさんの小屋を作り、高張ちょうちんに大のぼりを立てました。そして、鉄砲を打ったり、太鼓やほら貝を鳴らしたりしました。

尚徳たちはこの混乱をどのように收拾するかを協議し、役人たちを派遣して説得に努めました

## 幕末期の尚徳

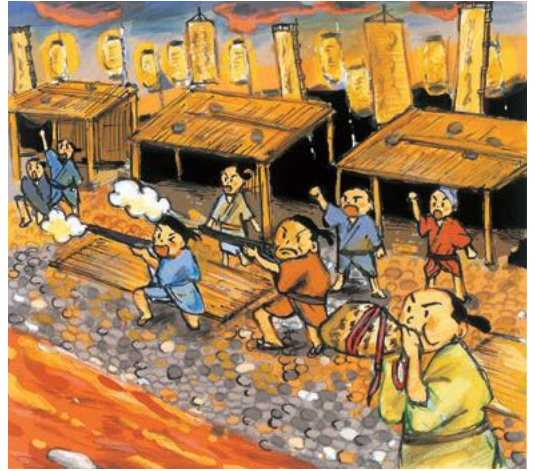
武田敬孝とともに勤王の志をもって京都へ出向き、各藩の志士たちや勤王の志を抱く公家たちと交流をもちました。

## 大参事

明治時代初期に置かれた官職で、現在で言えば副知事に当たり、幕藩体制の中では家老に相当します。1869（明治2）年、政府は版籍奉還を行い、続いて廃藩置県を実施して、旧大名の藩知事を東京に招集しました。そして、大洲県知事の下に大参事を置くこと定められ、山本尚徳が就任しました。



明治維新という改革の中で大きな功績を残しました。



大洲騒動（若宮河原で抗議する農民たち）

が、農民たちは聞き入れませんでした。15日には泰秋が種痘などについて説明し、解散するよう説得しましたが、それでも収まりません。大洲県庁には、力で押さえようとする強硬派と話し合いで解決しようとする穏健派が集まり話し合いましたが、意見がまとまらず、尚徳の責任を追及することになったのです。

その日、尚徳は自宅に帰り、「政府の方針に従い最善を尽くしたつもりであったが、皆の理解を得られず、この大騒動を起こしてしまった。この事態を收拾するには、自分が命を絶つ以外にない。」と決意し、自分

の部屋で切腹しました。翌日、切腹の介錯をした井口長右衛門が、尚徳の鮮血に染まった扇を河原に集まっている群衆に見せ、尚徳が自害したことを告げると、一同は解散し、大洲騒動が終結しました。時に、山本尚徳、46歳でした。

明治維新という改革の中で、新しい政治を行い、たくさんの功績を残した大洲県大参事山本尚徳を慕う人たちは、尚徳の死後、その偉大さに気付き、尊敬の念を高めていきました。尚徳は、没後50年に当たる1921（大正10）年に国から正五位という位を贈られました。そして、1931（昭和6）年8月には、山本尚徳大参事頌徳碑の建設を計画し、尚徳の屋敷跡地にあたる県立大洲女学校（現大洲南中学校）の隅に石碑を建設し、功績を後世に伝えることとしました。



山本尚徳頌徳碑

### 尚徳に対する 不満や反感

「西洋人は人間の生き血を吸っている。戸籍調査は、西洋人に生き血を提供するための年齢調査である。」「種痘は、毒を植えて子どもたちを殺し、人口減少を図るための策である。」「などという根も葉もないうわさが農民の間に広まりました。

### 嘆願書の内容

「旧藩主加藤泰秋の大洲在住を希望」「大参事に加藤玄内、小参事に加藤右一郎を任命し、他官吏を罷免」「士族に従来の俸禄を支給し、土族の帰農を停止して、農民が安心して農業に出精できるようにする」などがありました。

## ② 臥龍山莊をつくった河内寅次郎 (1853〜1909)

臥龍山莊は、大洲神社の麓の肱川随一の景勝地である臥龍の淵に面するところにあり、臥龍院と不老庵などの建物とすばらしい庭園からなっています。これらの建物は、貿易等で財を成した河内寅次郎によって、**構想と設計に10年、築造に4年の歳月をかけて造られました。**それでは、最初に寅次郎という人物について見ていきます。

寅次郎は、1853年、新谷で生まれました。幼い頃は、新谷藩士の矢野鎌淵に漢学を学び、その後は、八幡浜の上甲振洋の塾生となり、いつそう学びを深めました。幼い頃から大変賢く、「学んでのち門弟最高の席を占めた」とも言われていました。

1887 (明治20) 年頃、寅次郎は長崎に住んでいる華商 (中国系の商人) が木蠟を外国に輸出して成果を上げていることに着目しました。翌年、寅次郎は、喜多地方で生産する木蠟製品を輸出することを目的に、自ら海外貿易の新拠点となった神戸に乗り出しました。1890 (明治23) 年、

寅次郎は池田貫兵衛とともに、神戸市磯辺通に「喜多組」という株式会社を設立しました。関西各地の晒木蠟を外国向けに精製し、販売するための会社です。良質の木蠟を販売することで、他製品との差別化を図り、巨額の財を成しました。内子の製蠟家芳我弥三右衛門も同様の方法で成功しました。

ところで、「臥龍」という名は、川面に突き出ている蓬莱山が、あたかも



不老庵



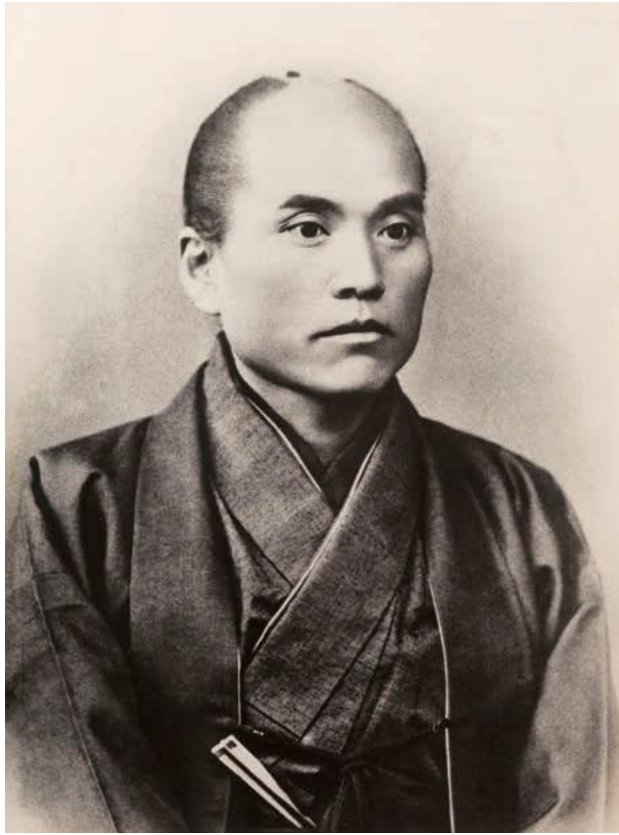
臥龍の淵



知止庵

### 蠟

ウルシやハゼの実から採取した蠟を原料とした和ろうそくは、室町時代から使われていましたが、大変高価なもので、江戸時代になるまで一般には普及しませんでした。明治になるとガス灯などの普及によってろうそくの需要は減り、断髪令によって鬢付油も不要となりました。明治中期からは海外向けの輸出が高まりました。海外では、植物由来の蠟を総称して、ベジタブルワックスと言いました。



河内寅次郎（臥龍山荘蔵）

肱川に龍が臥せているように見えることから、3代藩主泰恒によって付けられたと言われています。泰恒は、そこに、吉野から取り寄せたサクラ（桜）、龍田から取り寄せたカエデ（楓）を移植し、その後、歴代の藩主が風情を愛でる場所にしました。しかし、明治時代になってからは、放置されたままになり、付近は荒れてしまいました。寅次郎は、1899（明治32）年にこの地を購入し、川に突き出している**蓬萊山を含めて庭園とし、臥龍院や不老庵、知止庵を建てました。**

その後、寅次郎は神戸に住んだまま、1909（明治42）年に、56歳でその生涯を閉じました。構想に10年もかけながら、臥龍山荘へはほとんど行く機会がありませんでしたが、寅次郎の墓は富士山の麓に建てられ、その**墓の正面は臥龍山荘を向いています。**

次に、その臥龍山荘について詳しく見ていくことにします。

臥龍院の建造は、桂離宮などを参考にして、京都の建築家である八木氏を相談役として計画されました。また、木造茅葺きで寄せ棟造りの建物は、大工の草木国太郎をはじめ、**千家十職**である漆工・金工・木彫り師・

### 「吉野」「龍田」

現在の奈良県の地名。

### 千家十職

千利休を祖とする、表千家・裏千家・武者小路千家の三千家の家元が使う茶の道具を制作する工芸の家筋です。



臥龍院 撮影：河野 達郎氏

大洲が誇る名建築だぞ。



表具師・画工など、京都の工匠が関わっています。農家風のたたずまいでありながら、書院造りと数寄屋建築が見事に調和し、大変美しい建物です。

**不老庵は、たくさんの柱に支えられ、川沿いの石垣の上から肱川にせり出すように建てられています。**このような建て方を「懸け造り」と言います。また、庵は川に近いため、川面に当たった月光が反射して、竹網代張りの一枚天井を照らし、室内が明るくなるような工夫がされています。庵を舟に見立て、自然と人工の美をうまく調和させた茶室となっています。これらの臥龍院と不老庵は、大洲の棟梁・中野寅雄が中心となって造ったもので、その技術の高さには驚くべきものがあります。庭園は、肱川や富士山を借景として調和させるよう神戸の職人が築いたものであり、石積み of 工夫は、寅次郎が直々に監督したものです。

これらの建物を含めた臥龍山荘は、2011（平成23）年に**ミシュラン・グリーンガイド・ジャポンの一つ星**に選ばれました。

また、臥龍山荘のうち、臥龍院と不老庵など3つの建物は、2016（平成28）年7月25日に国の重要文化財に指定されました。

## ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン

フランスのタイヤメーカーであるミシュランが発行する旅行ガイドブックです。旅行者に勧めたい場所を多数掲載し、その中で、特にお勧めの場所を三つ星から一つ星までの星の数で表し、各地の魅力を伝えています。

**臥龍山荘にみる、わび・さびの心**

「伊予の小京都」といわれる城下町大洲。2011（平成23）年、ミシュラン・グリーンガイド・ジャポンで一つ星を獲得した臥龍山荘は、明治後期に、京都の名工たちを招いて建築されました。最も大きな茅葺き屋根の「臥龍院」の縁側、また茶室としてわびさびを表現した「不老庵」から眺める肱川は美しく、移りゆく季節の彩りを感じるすることができます。自然を巧みに取り入れ、名工たちの匠の技が光る庵は、何度訪れても新しい発見があるほど工夫がたくさん見られます。



臥龍山荘

### ③ 懸け造り

臥龍山荘の不老庵が懸け造りであることは既に触れましたが、ここで、「懸け造り」とはどのようなものか見ていきましょう。

「懸け造り」とは、**急な崖や山の斜面、川岸、海岸などに建物の一部分が張り出して建てられているもの**で、現在、日本全国に140件以上が存在しています。特に有名なものでは、京都にある清水寺本堂（1633年再建）の舞台が知られています。

これらの「懸け造り」は、山間地の急斜面が多い日本において、その斜面を活用し、効率的に建物を建てるために考えられた、歴史的・伝統的な建築様式の一つです。四国地方では、7件の建造物が存在しています。そのうち、愛媛県には3件ありますが、すべて大洲市内にあり、**臥龍山荘不老庵と如法寺毘沙門堂、少彦名神社参籠殿**がそれに当たります。



懸け造り

如法寺毘沙門堂は、1908（明治41）年、大洲の町を一望できる東側斜面に、毘沙門天（多聞天）を祭るために建てられました。堂の入口側のみが地面とつながっていて、建物のほぼ全体は、崖からせり出した状態となっています。明治時代の絵葉書には、堂の周辺に高い木が見られません。当時ここからの、大洲の町の眺望はすばらしかったことが想像できます。

少彦名神社は、少彦名命が祭られると伝えられている梁瀬山（やなせ）の腹に、1931（昭和6）年に建てられました。その参道の途中に

**参籠殿（少彦名神社）**  
所在地：大洲市菅田町大竹



この珍しい建築様式は、急斜面へ建物を造るために考えられました。



## 4 肱川の水運の歴史

肱川は、その名が示すように大洲

参籠殿が建てられています。参籠殿は、傾斜約30度の急斜面に、建物の93%がせり出し、通し柱が高い所では13mにもなり、外を見るとまさに宙に浮いているかのように感じられます。高さ、大きさともに最大規模である参籠殿の懸け造りは、伝統的な工法だけでなく、金属ボルトを用いたり、内部には当時流行したベニヤやガラス戸を多用したりするなど、他の懸け造りの建物の大半が明治時代以前に建てられている中で、昭和初期に建てられた近代建築としては希少な例となっています。

このような珍しい建築様式である懸け造りは、現在の建築基準法では耐震基準の関係から、ひとたび崩壊すると新築はもとより同じような形での修理もできないため、減少する一方で、建物の絶滅危惧種に値する構造の建造物となっています。

この参籠殿は、2013（平成25）年10月、歴史的な建造物などの保存活動を行っている民間の非営利団体「ワールド・モノユメント財団」が選定する危機遺産リスト「文化遺産ウォッチ」に登録され、修復の助成支援の要請が、世界に向け発信されました。そして、同年12月、アメリカとアジアの国際交流や教育、文化の振興への支援を行っている「フリーマン財団」からの助成を受け、2015（平成27）年3月に修復が完了しました。その後、2016（平成28）年5月30日には、市の有形文化財に指定されました。



筏流し



帆かけ舟（城山下付近）

### 肱川の特徴

源を鳥坂峠に発し、多くの支流を合わせて伊予灘に注いでいます。全長約103kmに対し、源流から河口までの直線距離は18kmしかありません。流れが緩やかであり「舟運」が発達しました。一方、洪水がはげにくい地形で水害が多く、古くから水位観測が行われ、「ナゲ」など特有の治水対策が残されています。

### 長浜地区

大洲城下の外港として整備された港町です。江湖と呼ばれる入り江状の港が形成され、藩主が参勤交代で使用する御座船が停泊しました。



肱川は地域の人々の生活を支えてきたのだ。

盆地を、「ひじ」のように大きく曲がりくねって流れています。また、源流部である西予市宇和町や野村町、そして大洲には、あちこちに平坦な盆地がある一方、五郎から下流と河口部は両側を山に挟まれて狭くなっていること、また、流域の大部分を山地が占めるわりには川の流れが緩やかであることなどが特徴としてあげられ、全国的にも珍しい河川となっています。

その結果、肱川は勾配が緩やかで、水量も年間を通じて豊富となり、これだけ大きな河川にもかかわらず、当時は堰せきがありませんでした。さらに、朝夕には、「肱川あらし」をはじめ、強い下りの風や上りの風が吹き、川舟などの航行に当たっては、潮の満ち引きともにもうまく活用していました。そして、道路や鉄道が整備されていなかった江戸期から大正期にかけて、**上流の各地から河口の長浜を結ぶ唯一の交通路**として生活物資や農林産物を運ぶ川舟や木材運搬の筏いかだが往来し、流域の人々の生活を支えてきたのです。

明治時代には、木材の需要が急増し、筏流しによる木材運搬が盛んになりました。肱川河口に位置する江湖では、上流から運ばれてきた木材が数多く集積され、和歌山の新宮や秋田の能代に並ぶ、**木材の一大集積地として全国に名をとどろかせました**。

この舟運は、昭和初期まで続きました。その間、上流部の坂石や鹿野川、小田川の小田や大瀬からは材木や木炭などの林産物が運ばれました。また、中流の大洲からは、穀物や野菜、繭などの農産物が長浜に向けて送られていました。一方、長浜からの上りの舟には、肥料や塩、酒、醤油などの生活雑貨が上流の村々まで運ばれました。

しかし、この舟運も、道路や鉄道が整備され、物品の陸上輸送が容易になるにつれ、筏流しとともに衰えていきます。それでも木材の筏流しは、舟運が消えてから約30年後の1953（昭和28）年まで続けられました。

### ●道路や鉄道の整備

- 1903 大洲―長浜の新道開通
- 1904 大洲―内子の鳥越とりこ回りが開通
- 1906 田処の増田藤太郎が私費を投じて面川橋から朝が峠までの道が開通
- 1913 初代肱川橋完成

- 1918 大洲―長浜に愛媛鉄道開通（1933（昭和8）年に国鉄に移管）

- 1929 大洲―鹿野川が開通

- 1935 国鉄が松山から大洲まで開通

- 1939 国鉄が八幡浜まで開通

### ●河港を示す地名

米津・岩津・大津（大洲）・渡場・宇津など。

### ●その他の主な河港

須合田・春賀・若宮・柚木・森山・鳥皆・鹿野川・坂石など。

## ⑤ 養蚕業・製糸業の盛衰

肱川流域の各地には、川の港をほうふつとさせる地名が残っているのはこのためだったのです。

大洲藩では、第11代藩主泰幹やすもとにより、養蚕や製糸が奨励されました。明治に入り、1882（明治15）年、喜多郡長しらいに下井小太郎したらいが就任するといっそう養蚕業が盛んになりました。

小太郎は、自ら桑園や蚕室などをつくり、先頭に立って養蚕業の振興に努めました。また、小太郎に協力した河野喜太郎こうのきたろうや程野宗兵衛ほどのそうべえ、河野駒次郎こうのこまじろうたちは、**県下有数の近代的な製糸工場を次々と設立**しました。1890（明治23）年〜1926（大正15）年の間に、大洲町では9か所の製糸工場が稼動し、本町3丁目には「**大洲繭売所**」（現在のおおぞ赤煉瓦館北隣）も設置されるなど、大洲はまさに「生糸の町」となりました。

大洲地方には、和紙や木蠟をはじめとした特産品生産の事業を賄うため、1889（明治22）年には株式会社大洲銀行が設立されました。しかし、養蚕・製糸業の急速な事業拡大のために、

繭売買所



製糸工場



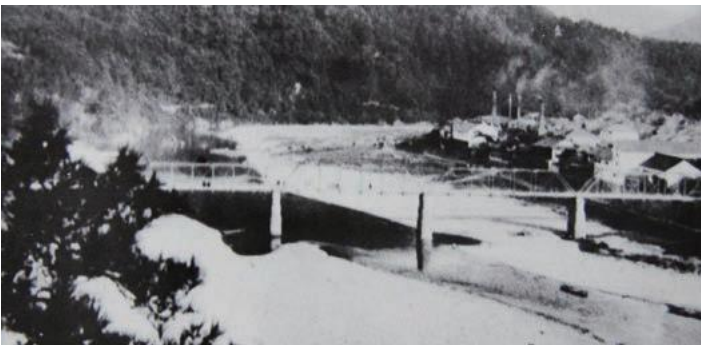
大洲銀行の一行だけでは対応できず、新たな金融機関が必要となりました。そこで、養蚕・製糸資金の供給を円滑に行う目的で設置されたのが、株式会社大洲商業銀行です。

大洲商業銀行は、1896（明治29）年4月に設立されました。本店は5年後に完成しますが、こ

当時は  
すごかったんだね。



初代肱川橋と肱南地区の製糸工場群



第1章 近世の始まり（平安・鎌倉時代）

第2章 大洲藩 加藤家の治世

第3章 激動の幕末

第4章 明治の発展

第5章 大正・昭和の展開

第6章 大洲市ゆかりの人々

それが現在の「おおず赤煉瓦館」です。

その後しばらくは好況が続きましたが、大正期になり、第一次世界大戦後の恐慌や化学繊維の登場によって、養蚕・製糸業は大きな打撃を受けました。その結果、大洲商業銀行は、1923（大正12）年に大洲銀行と合併し解散してしまいました。

太平洋戦争を経て、1965（昭和40）年頃までには、大洲市大洲や中村に数軒残っていた製糸工場も操業を停止し、すべての製糸工場が姿を消すことになりました。銀行としての役目を終えた煉瓦造りの建物は、その後様々な組織等が利用してきましたが、1990（平成2）～1991（平成3）年にかけて再整備が行われ、現在の「おおず赤煉瓦館」として新たなスタートを切り、大洲市指定有形文化財に指定されています。

## ⑥ おおず赤煉瓦館の建物の特徴

大洲商業銀行本店（現在の「おおず赤煉瓦館」）は、1901（明治34）年12月8日に完成しました。本館と倉庫とからなり、いずれも、煉瓦積みと和瓦の屋根という和洋折衷の外観で、日本独自の洋風建築となっています。

本館は、長手だけの段と小口だけの段を一段ずつ交互に積み重ね、ギリス積みになっています。建物の四隅には、煉瓦が柱状に積み上げられ、その先端が煙突状になっています。屋根は、寄棟造りの棧瓦葺で、2か所の鬼瓦には大洲商業銀行に由来する「商」の



おおず赤煉瓦館



養蚕業風景



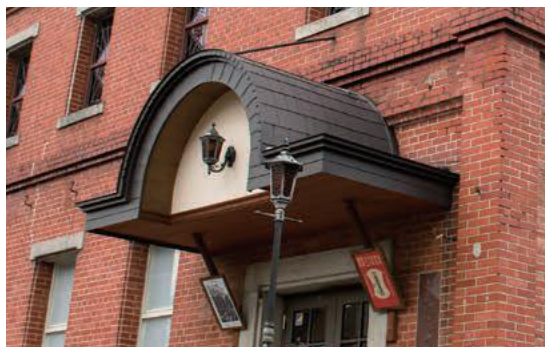
桑の木

字が入っています。また、軒には壁面から突き出して、雨水が壁に当たるのを防ぐ装飾的な造りのコーニスを巡らし、古典様式を模しています。

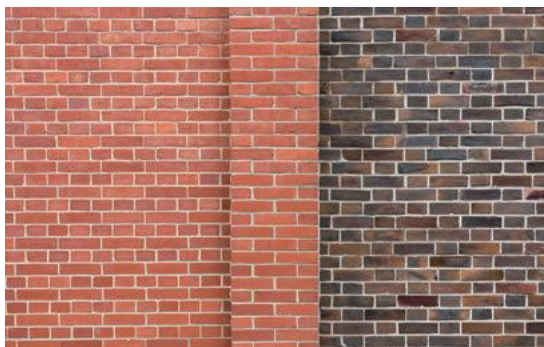
2棟の倉庫は、寄棟造り棧瓦葺きの屋根で、後に西側へ金庫が増設されます。これらの倉庫には、先に述べたような大洲地域の歴史的背景から、乾燥した繭が大量に保管されることになりました。養蚕・製糸業が発達した大洲地域ならではの建築物であり、大きな倉庫を構える銀行は他の地域ではあまり例を見ません。

本館と倉庫とを結ぶ外壁は、**本館がイギリス積み、倉庫は横一段に長手と小口とを交互に並べて積み上げるフランス積み**（正しくは「フランドル積み」となっていて、**2種類**の積み方が混在しています。このような煉瓦の積み方は、他にあまり例がなく、大きな特徴と言えるでしょう。

全国各地に、古い煉瓦積みの建築物は数多く残されていますが、銀行に繭を保管する倉庫が併設されるなど、地域の歴史や特色を色濃く反映しているという点で、「おおず赤煉瓦館」は大変珍しい建物と言えます。



コーニス



左がイギリス積み、右がフランス積み